

となるのではないかという疑問が持たれる。

この他にも、著者の所説のやや細かい点や比較法的検討について（批判的なものも含め）本書にコメントを加えたい点は多々あるが、紙幅に制約もあるので、評者はこれらの諸点からも知的刺激を受け、向学心を喚起されたことを述べるに止めたい。以上述べてきた

ように、本書はさまざまな点で刺激的な内容を持つものであり、本書を契機として公務員労働基本権論に関する更なる議論が展開される可能性、期待は大きいといえよう。

かわた・たくゆき 筑波大学大学院ビジネス科学研究科助教授。労働法専攻。

## 読書ノート

大沢真知子 著

### 『ワークライフバランス社会へ』

——個人が主役の働き方

小倉 一哉

（労働政策研究・研修機構副主任研究員）

本書は、専門知識がないと読めないような専門書ではなく、多くの人に読まれるべき一般向けの図書である。本誌の編集委員である評者としては、専門書に対する「書評」ではなく、本書の読後感と一般読者への普及にとって参考になるような見解を述べるため、「読書ノート」を採択した。

読んでよかった。本書を構成する重要なテーマである、労働時間や非正規雇用について浅薄ながら研究している評者にとっても、参考になる情報やサジェスションがいくつもあった。一般向けという本書の役割からすれば、多くの企業経営者、働く人々、労働組合関係者、主婦、政策立案者、学生等に読まれるであろうし、またそうであって欲しい。

本書の長所は、「ワーク・ライフ・バランス」という観点から、今日の我々を取り巻く労働状況について事実を紹介し、欧米との比較から問題点を指摘し、今後のあるべき方向性についても、とてもバランス良く適切に叙述されていることだ。特に、さまざまな個人に対するインタビューは随所で丁寧に紹介・叙述されており、本書の最大の魅力であると感じる。また第5章では、現下の所得税制、社会保険制度について、わかりやすく解説している。個人的にはこの章がいちばん役に立った。大沢氏をよく知っているつもりだった評者は、彼女がこれほど個人へ



●岩波書店  
2006年3月刊  
B6判・229頁・2100円  
(税込)

●おおさわ・まちこ 日本女子大学人間社会学部現代社会学科教授。

のインタビューや制度の話に興味を持っていることに、ちょっと驚いた。というのも、これまで評者は、彼女の分析手法はマイクロデータを使用した実証分析が中心だろうと思っていたからだ。研究の「幅」が拡がり、「温かさ」が増したのだろう（生意気で失礼）。

他方、一般向けとしたためか、主張の構図が単純化されていると感じる部分がある（44頁、77頁など）。「終身雇用制度」や「年功型の賃金制度」や「職能給」は、果たしてどの程度の労働者をカバーしてきたのだろう。ただ、編集サイドから、研究書にありがちな、限定的な叙述をあえて避けるように言われたのかもしれない。また主張の基になっているいくつかの情報源は、新聞や週刊誌等に依拠している（3頁、34頁、104頁など）。これらは後学のためにも（たとえ一般向けであっても）、原典を紹介して欲しかった。さらに細かい点を指摘させていただく。30頁の労働時間の制度に関する叙述であ

るが、日本の残業割増率は国際的に見て低だけでなく、割増賃金の算定基礎に諸手当や賞与が入らないため、「25%」は、実際には欧州等における50%の「半分」よりももっと低いのだ。もっとも先刻承知の上での割愛なら、大沢氏に対しては余計な指摘であるが。

大沢氏はこれまで一貫して、ワーク・ライフ・バランスの研究に取り組んでこられた。特に彼女にとって歴史の長い、日米比較に始まった研究が、近年においては日米欧の国際比較という観点からアプローチされている。この点は、ワーク・ライフ・バランスを考える上で決定的に重要であり、その視点が洗練された氏の今後の活躍に大いに期待したい。

ちゃんとした読書感想文は以上で終え、以降は本書を読んで触発された評者の勝手な思いこみを書く。近年、日本の企業経営・人事管理は、アメリカのほうばかりを見てはいないだろうか。ここ15年ほどの成果主義の横行、無意味なことも多い数値目標の設定、短期間で測定される業績、「コンピテンシー」などという訳のわからない概念（高業績を上げる社員の行動特性！）などは、労働市場・企業統治の構造や働き方が異なる日本に対して、アメリカの管理手法を無理矢理導入したように思えてならない（しかも本家のアメリカで対象外の人にまで適用されているのでは？）。成果主義導入の動機はほとんどの場合、人件費削減であるが、その結果は、多額のコストをかけてハゲタカのような人事コンサルタント会社を儲けさせ、かえって人事部や管理職の雑用を増やし、多くの社員のやる気を削いでいるのではないか。いくらがんばっても正当に評価されず、昇進も昇給もなく、仕事は増える一方……。そんな組織への憂えを知らない人は神様か不感症か。いや、成果主義のほとんどの被害者はただ耐えているのだろう。自分では成長したつもりこの10年間、気づけば一度の昇進も昇格もなく、結局、組織からは評価されていないのだと感じる評者も、近頃は耐えることの多い日々となった。もっとも評者の場合、このように嫌味や文句は折を見て表明しているのだが……。

しかしずっと高尚な観点からみると、今流行って

いるこれらのシステムは、長い歴史の流れの中では、ほんの些細な、ある意味で「どうでもいいこと」であると思う。もっと重要なことは、個々の人間が幸福を感じることができるような社会とはどういう社会なのかを考えることであり、そのために今何が必要かを論じることであろう。評者の知る限り、欧州の人々は、自分たちの生き方、暮らし方に関する人生観、哲学とかいったものを、我々よりも大切にしていると思う。だから時代の変化にはそれほど敏感ではなく、必要だと言われる改革のスピードも鈍いことが多い。しかし、本当に大切なものを失っていない人が多いと、少なくとも我々日本人よりも精神的にゆたかだなあと、感じてしまうのである。そんな勝手な思いこみは、評者だけだろうか。

本当に当たり前のこと、“労働が人生のすべてではない”ということが、もっともわかっているのが大陸欧州の人々で、もっともわかっていないのがアメリカ人なら、日本人はその中間に落ち着いて良さそうだ。経済システムから見れば、そんな仮説が成立する。しかし実際には、市場経済原理がもっと強いはずのアメリカより、日本の労働者のほうが、はるかに“人生のすべてが労働”という人が多い。つまり多くの日本人は、相対的に見て、先進国の中でも異常な働き方をしているのだ。絶対的に見ても、過労死・過労自殺が相当数あることが異常である。関連することだが、ちょっと前、内戦や貧困にあえぐアフリカのある国で、「日本では、年に3万人も自殺する人がいるんでしょ？かわいそうね」と現地人がテレビで喋っているのを見た。わが国は、政情不安と貧困に置かれた国の人にも、そんなふうに思われているのだ。だいぶ飛躍してしまったが、本書のおかげで自分の人生観についても考えさせられた。

「あとがき」で愛犬たち（大、ルーバーブ、グロー）に感謝している。研究者の中で、著したものの「あとがき」に飼い犬への謝辞を書く人を、評者はほかに知らない（しかも彼女にとってはこれが初めてではない！）。しかし、飼い犬とたわむれる時間が、自分にとってとても大切な「癒し」になっていることに大いに共感する評者にとって、この「あとがき」はとても気に入った。